

## 書評

斯波照雄・玉木俊明編

### 『北海・バルト海の商業世界』

(悠書館、二〇一五年)

鴨野 洋一郎

### はじめに

評者はこれまで中世後期からルネサンス期にかけてのイタリア商人の活動に着目し、その一つであるフィレンツェ商人によるオスマン帝国での商業活動について調べてきた。このたび研究会より昨年刊行された斯波照雄・玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』(悠書館、二〇一五年)を論評する機会をいただいたので、以下では評者の研究分野とリンクさせながら同書の内容を紹介し、地中海商業との比較という観点からその意義について論じたい<sup>1)</sup>。

史苑(第七七卷第一号)

### 1. わが国の「西洋経済史」と『北海・バルト海の商業世界』

『北海・バルト海の商業世界』の具体的な内容に入る前に、ここではわが国の「西洋経済史」における中世商業史へのアプローチを振り返り、そこに同書を位置付けたい。

わが国において、伝統的な「西洋経済史」はいわゆる「大塚史学」の強い影響力を受けてきた。「大塚史学」はイギリスにおける「産業資本」の形成が近代に独自の「資本主義」を準備したと考え、この考えにもとづきイギリスを軸とする「西洋経済史」を描いた<sup>2)</sup>。ここで中世という時代は近代から離れた前段階にあるものとされ、大きな位置を占めることはなかった。また中世について農村経済や都市のギルドの問題が論じられることはあっても、中世の商業活動そのものが近代とのかかわりで議論されることは少なかった<sup>3)</sup>。

他方で近年わが国でも注目される「グローバル・ヒストリー」とよばれる分野は、前近代における国際商業を重視する。この分野はさまざまなテーマを切り口に一つの国や地域にとらわれない巨視的な歴史を描くが、必然的に国際商業を主要なテーマの一つとし、広い地理的範囲における人やモノの動きを取り上げてきた。ただ「グローバル・ヒストリー」が大きな関心を寄せるのはヨーロッパがアジア

やアメリカと直接つながっていく近世以降であり、それ以前の中世におけるヨーロッパの商業活動がこの流行とともに着目されるようになったとはいいたい。

つまり中世ヨーロッパ商業の歴史は、わが国ではまだ「西洋経済史」全体のなかに確固たる位置を占めていないのが現状である。さらにこのテーマ内部においても、わが国では克服すべき課題がある。それは、二大商業圏として知られる地中海商業圏と北海・バルト海商業圏それぞれにたいする一面的な理解である。わが国では伝統的に、地中海商業圏では香辛料や絹織物など一部の階層のみが消費できる奢侈品が取引され、北海・バルト海商業圏では穀物や木材など生活するための必需品が取引されたと理解されてきた。しかし齊藤寛海が明らかにしたように地中海商業圏では小麦や葡萄酒などの食糧も大規模に取引され、またさまざまな工業原料や中級の工業製品も流通した<sup>3</sup>。そして『北海・バルト海の商業世界』で論じられるように、中世の北海・バルト海商業圏では大航海時代の幕開けとともに嗜好品などの植民地物産も活発に取引されるようになった。これまで多くの研究者が二つの商業圏の実態を具体的に解明したことで、今日ではわが国でもこれら商業圏の多様な姿が明らかにされつつある。しかしながら、ステレオタイプなイメージが払しょくされたとはいいい切れぬ。

こうしたわが国における「西洋経済史」の状況を考えるならば、本稿で取り上げる『北海・バルト海の商業世界』はこの分野における重要な成果であるといえよう。この共著では、各著者が取り組む北海・バルト海商業にかかわる分野をわかりやすく説明しつつ専門的な論点も提供している。取り上げられる地域は多岐にわたり、さまざまな言語や宗教（無宗教も含め）をもつ人々が対象となる。北海・バルト海商業圏のほぼすべてをカバーするといつても過言ではない。この共著により、読者はステレオタイプなイメージとは異なる、実証研究にもとづいた多様でリアルな北海・バルト海商業圏のイメージを描くことができる。さらに読者は参考文献を頼りに各執筆者が提供する内容を深めることもできる。わが国の「西洋経済史」における中世商業史のウェイトを高め、その具体的なイメージを定着させるために必読の書となるだろう。

さらに『北海・バルト海の商業世界』は、これまで中世という枠内で語られることが多かった北海・バルト海商業について、近世における展開も視野に入れている点で興味深い。ヨーロッパがアジア・アメリカと直接取引する時代に入り、北海・バルト海商業の性質はどのように変化してきたのか、またその変化が近代資本主義社会の発生とどのようにかかわったのかといったことが論じられる。「西洋経済

史」における中心的なテーマである「資本主義」にたいしても、北海・バルト海商業という側面からアプローチしようとするのである。この点についてはあとで改めて取り上げるが、同書が中世商業史の範疇に収まらない時間的な広がりをもっていることは強調すべきである。

さて前述のように、評者はこれまでイタリア商人の活動について研究してきた。イタリア商人が主たる活動領域とした地中海商業圏もまた北海・バルト海商業圏とならび中世ヨーロッパ商業を構成する要素であった。そこで次節では、『北海・バルト海の商業世界』の内容を地中海商業と比較しつつ紹介していきたい。ただ「地中海商業」というのもその全体を視野に入れることは評者の能力をはるかに超えており、もっぱら比較するのは専門とするフィレンツェ商業となることをあらかじめお断りしておきたい。

## 2. 各章の内容および地中海商業との比較

では各章の内容を、地中海商業の場合と比較しつつみていきたい。

第一章はノヴゴロドにおける商館交易について説明し、ハンザ商人がノヴゴロド商人と行った異文化交流の特徴を商館規約や条約にもとづき明らかにする。またこうした商

館交易の比重がリーフラントのハンザ都市台頭により低下していく経緯も追う。地中海商業においても異文化交流は顕著であり、数百年ものあいだ続いたヨーロッパとイスラム世界との交易はよく知られている。商館規約に類似したものとしては、居留民規約があげられる。たとえばオスマン帝国に滞在するフィレンツェ商人はフィレンツェの海事監督官が作成する居留民規約に則って現地商人と取引し、また現地商人との紛争を解決していた。異文化交流においては、条約や規約による法的枠組みが必要とされたのである。

第二章はリユーベックなど海と直接的なかわりをもつた「海のドイツ」と、内陸交通を通じて海とかわることになる「陸のドイツ」を対比させつつ、双方の歴史的展開を大航海時代以後までみていく。近世においてもイングランドや低地地方と結びつき発展する内陸都市ケルンの例は興味深い。地中海商業においても、内陸都市と海とのつながりは重要であった。フィレンツェは内陸都市としてイメージされがちだが、同市の商人はヴェネツィアやジェノヴァ、ピサといったイタリアの海港に出入りし、それらの船を使って遠隔地まで渡航していた。つまりフィレンツェはれっきとした「海上勢力」だったのであり、こうした内陸都市も海域での商業を考える上で不可欠な要素となる。<sup>5)</sup>

第三章は塩とビールの流通からバルト商業を考察する。後者については、都市が規制強化によってビールの品質を維持し、近世には都市周辺地域にビールを独占的に流通させていった。またビールの流通網を基礎に植民地物産が流通することになり、商業ネットワークの連続性がみられたと論じる。政策的な品質維持といえば、フィレンツェでも毛織物工業組合や絹織物工業組合が職人らを監督下に置き、製品の品質を維持したと考えられてきた。こうした組合の規制は産業の健全な発展を阻害したとされてきたが、近年では組合の統制力そのものが疑問視されている<sup>6</sup>。中世や近世の都市工業をどう理解するかという問題は、ヨーロッパの南北ともに課せられているといえよう。

第四章はヴァイキングと商業とのかかわりを扱っている。九世紀半ばに北方世界にはイスラーム世界から大量の銀が流入した。このことは北方世界の交易活性化をもたらした結果としてルーシとビザンツ帝国との交易協定が締結されることになった。イタリア諸都市の商人が地中海へと本格的に進出する直前の時期に、すでにユーラシアの北西で国際商業の新しい秩序が形成されつつあったという事実は興味深い。こうした新しい秩序およびその前提となったイスラーム世界との交易が、地中海商業さらにはヨーロッパ全般の商業の活性化にどのような影響を及ぼしたのか。

利用できる史料は限られているものの、考古学的史料なども積極的に使うことで今後究明される必要があるだろう。

第五章はアイスランドでつくられる羊毛布「ヴァズマール」について述べる。この羊毛布は外国船を使ってノルウェーで販売され、通貨としても機能した。またヴァズマールは垂直型の織機を使って織られるため、女性が織布工程の担い手となっていた。地中海商業においても、羊毛布すなわち毛織物は主要な商品であった。とりわけ評者が研究するフィレンツェの毛織物は周知のように国外でも大量に取引されていた。ただ国外で販売されるフィレンツェ毛織物は比較的高価であったのにたいし、ヴァズマールは高品質ながらノルウェーの貧しい市民や修道士、漁民によっても購入されたという。この羊毛布が具体的にどのような種類の布であったのか、さらに具体的に知りたいところである。

第六章は北ノルウェーからの干シダラ輸出について論じる。はじめブリテン諸島向けであった干シダラは、その後ベルゲンに居住するハンザ商人によって輸出されるようになった。黒死病流行後の困難な状況にあっても、ノルウェーは商業漁業に特化することでその経済への影響を抑えることができた。黒死病の影響にかんじていうと、フィレンツェでもこの病により多くの人の命が奪われた。ただその結果、多くの非熟練労働者を必要とする毛織物工業が困難な状況

に陥ったものの、かわって少数の熟練労働者を必要とする絹織物工業が成長したとされる。絹織物の多くは国外の宮廷などに輸出され、フィレンツェの産業を支えることとなる。ノルウェーと同じく、フィレンツェも国際商業とかかわる経済部門を成長させることで未曾有の難局を乗り切ろうとしたのである。

第七章はハンザ商人とブルツヘさらにはフランス西部との関係を述べたものである。ハンザ商人はブルツヘでバルト海の穀物を供給してイングランド羊毛を購入し、さらにワインや塩を求めてフランス西部にまで達した。本章はフランスとの関係からハンザやブルツヘへの衰退局面を論じる。地中海世界の商人もまた、一三世紀末にキリスト教徒がジブラルタル海峡を制圧したのちに海路で北西ヨーロッパに向かった。メデイチ銀行はブルツヘと強い経済的結びつきをもち、フィレンツェはボルドーからワインのみならず繊維工業に不可欠な染料の大青も輸入していた。二大商業圏の商人が角逐し、これらの商業圏に影響を与えた場として、ブルツヘのみならずフランス西部の商業も注目されるべきだろう。

第八章はリユーベック商人を事例として、中世ハンザ商人の世界を具体的に描く試みである。彼らは学校で読み書きを、また親戚から商業技術を学び、経験を積んだのちに

やがて商人として独立した。そして結婚により商業ネットワークを広げ、政界にも進出した。ここで描かれるハンザ商人の姿は、評者が取り組むイタリア商人の姿と多くの点で重なるものであり、とても興味深い。ただ、本章も指摘するように複式簿記や海上保険といった商業技術についてはイタリア商人がハンザ商人に先駆けて駆使していた。二つの商業圏の商人像を比較する試みはこれまであまり行われてこなかったが、この比較により商業技術の伝播をはじめとする商人文化の影響関係がある程度解明できるかもしれない。

第九章は近世スウェーデンがバルト海一帯の商業活動から得られる利益を効率的に集めようとする試みと、それと関連したストックホルム首都化構想を説明する。前者の試みは商業活動を特定の都市に集中させ、そこで課税する政策に現れる。ストックホルムはそうした都市で最も重要な一つとなり、さらに首都として整備されることになる。地中海において政策的に都市を整備した例としては、近世のリヴォルノがあげられる。リヴォルノは一四二一年にフィレンツェのものとなり、一六世紀半ば以降はトスカーナ大公によって港湾都市として整備された。同市には北西ヨーロッパから多くの船舶が訪れ、「リヴォルノ憲章」発布後はユダヤ人も移住しそこで活発な商業活動を行った。

第一〇章は北大西洋を広域的に支配した海洋帝国の近世デンマークがエーアソン海峡通行税を徴収しつつ、国際商業にも積極的に乗り出していた事実を説明する。デンマークはアメリカ独立戦争時に植民地物産の輸送で好景気に沸いた。デンマークの中立的な国際商業は、当時のグローバル経済を維持させる上で大きな役割を担ったという。地中海商業においても、戦時中における商業ネットワークの維持がみられた。たとえば一五世紀後半のフィレンツェは、ヴェネツィアがオスマン帝国と断続的に戦争しているあいだオスマン帝国と友好関係を結び活発な貿易を行った。これによりフィレンツェの繊維製品は前世紀と同じく東地中海の市場で販売され、フィレンツェに富をもたらす。デンマークの場合とともに、商業ネットワークの連続性や柔軟性を示す事例といえよう。

第一章は北海・バルト海と陸上交易との関係を論じる。ユトランド半島の横断ルートは北海とバルト海を結び、内陸交通やハンブルクなどの港湾都市はドイツの内陸都市を北海さらには大西洋と結びつけていた。このことは、北海・バルト海商業圏がニュルンベルクなども含む広域的な商業圏であったことを示す。地中海商業圏もヨーロッパ内部と内陸交通で結ばれていたものの、ジブラルタル占領後はこのを經由する海路が主体となった。他方で東のアジア世界

とは内陸交通を通じて長らく結びつき、たとえば中国やペルシアからは陸路で大量の生糸が地中海まで運ばれた。いわゆる「絹の道」である。

第二章は近世イギリスと北海・バルト海、さらには大西洋との商業関係を説明する。注目すべきは、鉄や木材、タールといった造船資材の輸入先としての北海・バルト海世界の重要性である。一八世紀後半にイギリスは大西洋貿易を大規模に展開するが、この貿易は北海・バルト海を通じてもたらされる造船資材なくして成り立たなかったという。地中海商業圏においても、こうした資材は不可欠な商品であった。古代では木材に恵まれないエジプトがレバノン杉を輸入し、中世ではイスラーム世界がイタリア商人を介して木材やピッチ、縄を輸入したとされる。イギリスの鉄輸入は産業革命へのプロセスに位置付けられるという点で独自だが、地中海世界においても商品としての資材が大規模に流通したことは留意すべきである。

第三章は近世オランダが「母なる貿易」としていたバルト海貿易について論じる。一七世紀半ばまでのオランダのバルト海貿易は、ポーランドからの穀物輸入と塩や植民地物産の輸出を特徴とした。オランダはその後「原材料の時代」となっても穀物輸入を続け、さらに金融・情報の拠点となることで手数料収入も得る。地中海商業圏でも、穀

物はときとして「密輸」してまで調達しなければならぬものとなった。たとえばプレヴェヅ海戦後に食糧危機を迎えたヴェネツィアは、フィレンツェ商人に依頼してオスマン帝国からの小麦の「密輸」を試みている<sup>1)</sup>。人間の生存に不可欠な穀物の輸送をめぐる人々の苦勞が、二つの商業圏それぞれから伝わってくる。

## おわりに

これまで『北海・バルト海の商業世界』各章の内容をまとめつつ、その内容を地中海商業の場合と比較した。評者の力量不足から実際にはフィレンツェ商業における類似した事例を列挙するだけに終わってしまったかもしれない。ただその比較からあえて二つの商業圏の類似点と相違点を取り上げるなら、以下になるだろう。

まず類似点としては、都市の商人が中心的な役割を担っていたこと、港湾都市のみならず内陸都市も海上交易とながっていたこと、異文化交易がみられたこと、食糧や衣類、資材といった必需品が取引されたこと、そして交易を円滑に進めるための商業技術が発達したこと、などである。もちろんこれらは二つの商業圏に限らず、アジアなどにおける他の広域的商業圏にも当てはまる特徴かもしれない。

ただ二つの商業圏は中世後期から近世にかけて長いあいだ接触・交流を続け、また相互に影響を及ぼしてきた。類似点はこうした接触・交流の結果としてみるならば、注目すべき特徴となる。

他方で北海・バルト海商業に特徴的と思われる点としては、「ハンザ」という組織が広域的に存在していたこと、ヴァズマールのような安価な織物も海を越えて輸送されたこと、スウェーデンのように交易の国家統制が試みられたこと、そして近世に入っても低地地方やイギリスと結びつくことで新たな展開がみられたことなどがあげられる。最後の二つの特徴は、近世に（少なくとも相対的な）停滞を余儀なくされた地中海世界にたいし、近世も堅調に成長した北海・バルト海周辺地域がもっていた強みを表している。すなわち、主権国家の成立と大西洋経済とのつながりである。近世における地中海世界の運命を考えるには、これらの観点からその運命を北海・バルト海世界のそれと比較することが必要なだろう。

この近世における展開にかんして、『北海・バルト海の商業世界』の序文は北海・バルト海世界を「資本主義」を生みだした場として定義する。最初に述べたように、伝統的にわが国ではイギリスが近代的な生産様式としての「資本主義」を準備したと理解してきた。イギリスはまぎれも

なく北海周辺の国家であるが、同書の序文はイギリスに限らず北海・バルト海とかかわる諸地域全体において「資本主義」が姿を現したとする。その具体的な根拠は、同書のなかで必ずしも明確にされているわけではない。前述したような近世における北海・バルト海世界の強み―主権国家の成立と大西洋経済とのつながり―が、この序文で定義される「資本主義」の成立ともかかわっていたのだろうか。ただこの強みを認めるとしても、北海・バルト海商業圏を「資本主義」と結びつけることについては、いまいちど慎重であるべきと評者は考えている。

以上、地中海商業の一側面を研究対象とする評者が『北海・バルト海の商業世界』の内容について地中海商業の場合と比較しつつ論評してきた。各執筆者の意図とは異なる理解や的外れな見解もあったかと恐れているが、お許しいただければと思う。はじめに述べたように、『北海・バルト海の商業世界』は中世および近世におけるヨーロッパ商業の歴史的意義を訴えるのに十分なテーマの広がり、実証にもとづく具体性や説得力をもった共著となっている。今後もこのような著書を通して北海・バルト海商業について見識を深めたいと願う一方で、評者が取り組む地中海商業についても積極的に発信していく必要性を痛感する次第である。



註

- (1) 本稿はバルトロースカンディナヴィア研究会二〇一六年一月例会で評者が報告した内容をまとめたものである。
- (2) この考えを簡潔に叙述したものととして、大塚久雄『欧州経済史』(岩波書店、二〇〇一年)。
- (3) ただわが国では、中世の商業ネットワークに着目したF・レーリヒの論文が早くに翻訳された。F・レーリヒ「瀬原義生訳」『中世の世界経済』(未来社、一九六九年)。
- (4) 齊藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』(知泉書館、二〇〇二年)、一七七-二〇五頁。
- (5) 鴨野洋一郎「一五世紀後半におけるフィレンツェ毛織物会社のオスマン貿易―クワンティ家の経営記録から―」『史学雑誌』第一二二編第二号、二〇一三年、四四-四五頁。
- (9) R. A. Goldthwaite, *The Economy of Renaissance Florence* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2009), pp. 342-349.
- (7) 鴨野洋一郎「一五〇〇年前後のフィレンツェ絹織物工業と国際市場―セツリスストーリー金箔会社の経営記録から―」『西洋中世研究』第二号、二〇一〇年、一四三-一四五頁。
- (8) B. Dini, 'Aspetti del commercio di esportazione dei panni di lana e dei drappi di seta fiorentini in Costantinopoli negli 1522-1531', in *Saggi su un'economia-mondo. Firenze e l'Italia fra Mediterraneo ed Europa (secc. XIII-XVII)* (Pisa: Pacini, 1995), pp. 221-223.
- (9) 齊藤『中世後期イタリアの商業と都市』二六八-二七五頁。
- (10) H・クレンゲル「江上波夫・五味亨訳」『古代オリエン

ト商人の世界』(山川出版社、一九八三年)、八一-八二頁；  
A. Saporì, *The Italian Merchant in the Middle Ages*, Eng. transl. (New York: Norton, 1970), p. 61.

(11) 齊藤『中世後期イタリアの商業と都市』二二八-二五七頁。  
(関東学院大学経済学部講師)